

# 「清兵衛と瓢箪」の舞台はどこか

## —— 本文からの検証 ——

寺 柚 雅 人

はじめに

志賀直哉「清兵衛と瓢箪」の舞台はどこか。「暗夜行路」では時任謙作は尾道の千光寺山にある棟割長屋を寓居としているが、「清兵衛と瓢箪」の本文には「尾道」も「千光寺」も出てこない。

ただし、この作品は著者の尾道滞在時に船中で原話に接し、<sup>1</sup>今も残るあの棟割長屋で執筆されている。「尾道」は本文のどこかに潜んでいる可能性はある。そこで、「清兵衛と瓢箪」の初出本文とその後の単行本所収本文を比較し、その会話文の異同から「尾道」をさぐってみることにした。

一 尾道弁はどちらか？

昨秋の尾道学講座<sup>2</sup>で、志賀直哉作品「清兵衛と瓢箪」について話す機会があった。集まってくださったおよそ百人の尾道市民に次のように尋ねてみた。

「次の(1)から(4)の会話文で、より尾道弁らしく聞こえるのは、甲と乙のどちらですか？」

- (1) 甲 かふいふんがエ、んぢや  
乙 かふいふがエ、んぢや
- (2) 甲 ちよつと、見せてつかわつしえな  
乙 ちよつと、見せてつかあせえな
- (3) 甲 十錢にまけときやす  
乙 十錢にまけときやんせう

(4) 甲 直ぐ錢持つて來やすけえ

乙 直ぐ錢持つて來やんすけえ

これらはいずれも「清兵衛と瓢箪」にあり、(1)は奇抜な形をした瓢箪がよいというアドバイスに対して、それをはねつけた清兵衛の発言である。清兵衛が「こういうのがいい」と言い張る瓢箪は、反対にごく平凡な形をしていた。

(2)(3)(4)は、清兵衛が裏通りの仕舞屋しだやで「震ひつきたい程にいいの」を見つけ、お婆さんから十錢で購入する場面にみえる。(2)と(4)は清兵衛の発言、(3)はお婆さんの発言である。ちなみに、この短編の末尾で地方の豪家ごうかに六百円で引き取られる瓢箪はこれである。むろん、この瓢箪もごく「普通な形」をしていた。

## 二 著者の修訂と本文の異同

(1)から(4)に甲と乙の別があるのは、本文の異同によるものである。つまり、「清兵衛と瓢箪」の本文は、大正二年元日の「讀賣新聞」に発表された初出本文とその後に行きされた本文が同一ではないので

ある。

具体的にいえば、甲が大正二年の初出本文で、乙は大正六年刊の『大津順吉』<sup>3</sup>が大正七年刊の『夜の光』に収録された本文である。前者と後者の間に多くの異同があることについては少し詳しく述べたことがあるが、表現に関する字句の異同は自然しぜんに出来たものではなく、著者が表現の改善をはかり、意図的に生じさせたものと考えられる。

そこから、著者の尾道生活での見聞から生まれたこの作品では、登場人物の発言はより正確な尾道弁へと修訂されているのではないか、という推測が生まれる。なにしろ、初出本文は大正元年十一月十日の尾道到着5の後、短時日のうちに仕上がっている。尾道弁の会話文が正確でないのは当然ともいえる。

また著者には初出本文の執筆後も尾道に滞在して尾道の人々と交わる期間があった。それは知り得た、しかし曖昧さの残る尾道弁を洗練する時間でもあっただろう。

## 三 尾道市民による会話文の検証

会話文の修訂がそのように行われているならば、

尾道市民は普段の言葉を選ぶことで修訂後の本文を指し示すことができるのではないか。またそれは、「尾道」という字句を本文のどこにも見せないこの作品が、その底に「尾道」という土地との近接性を伏在させていることの小さな裏付けともなるのではないか。市民の皆さんに甲と乙のどちらが尾道弁らしいかと尋ねたのは、そのような思いがあったからである。

「清兵衛と瓢箪」の本文は、実は(1)～(4)のすべて甲から乙へと推移している。尾道市民がこうした本文の動きの実際を知ることなく、自らの耳を頼りとして著者の修訂の方向を言い当てることを私は予想し、期待していたのである。

返ってきた答えは、おおむね予想どおり、期待どおりであった。(2)(3)(4)については尾道弁らしい表現として修訂後の会話文、すなわち乙が選ばれた<sup>(6)</sup>。著者の修訂は、やはり「尾道」に向かっていたのであった<sup>(7)</sup>。

#### 四 一つの例外をどう捉えるか

だが、(1)については、市民は一樣に乙の「かふい

ふがエ、んぢや」よりも初出である甲の「かふいふんがエ、んぢや」の方が尾道弁らしいと言う。それではあべこべに「尾道」から遠ざかることになる。これはどう理解すべきであろうか。

著者が(1)に対しても、(2)(3)(4)と同じ方向の修訂を意図していたとすると、(1)にだけは時を経て尾道弁理解に至みが生じ、のみならずそれを正しいものと確信するまでになったとでも解さざるをえないが、それはちよつと考えにくい。

とすれば、(2)(3)(4)とは逆の方向に字句が動いた(1)は著者の修訂ではない、つまり「ん」を脱落させた誤植である可能性も視野に入れなければならなくなる。

#### 五 現行本文は脱字を踏襲している

一般に活版印刷の工程において一字の衍字<sup>えんじ</sup>や脱字は犯しやすいミスである。また誤りであると即断しにくい場合は、校正においても見逃されやすいといえる。

現に大正七年の『夜の光』では、「賣らんといて」という清兵衛の言葉が「賣らんといつて」と変じて

いる。<sup>9</sup>（売らないでいて）であつたものが（売らないと言つて）と文意も変わるものであるが、この「つ」一字の衍字は大正十一年の『壽々<sup>すず</sup>』ではそのまま踏襲され、訂正されたのは昭和十二年の九卷本全集においてであつた。

実は、(1)の異同もこの『夜の光』で発生しているのである。<sup>9</sup>この本文が、会話文で「つ」の衍字と「ん」の脱字を同時に引き起こしている可能性がある。

そして、(1)の異同が大正七年の『夜の光』で生まれているのに対して、(2)(3)(4)の異同はすべて大正六年の『大津順吉』で生じている点にも注意したい。これは、尾道市民がより正確な尾道弁として選んだ字句がすべて『大津順吉』収録本文にはそろつていたということを意味している。著者はこの時点で、(2)(3)(4)の初出本文に対しては尾道弁への修訂の必要を認め、(1)の初出本文にはその必要を認めなかつたということではなからうか。

尾道生まれのある知人は、（こういう瓢箪がいい）という意味を表現するなら「かふいふんがエ、んぢや」と言うべきで、「かふいふがエ、んぢや」という言い方はそもそも尾道弁には存在しないと言う。「ん」は瓢箪を表す「の」の転であるから、そこには「こ

うというのがいい」を「こういうがいい」と言うのと同じ不自然があるのだろう。

また、本文には別に「子供ちやけえ、瓢<sup>ひょう</sup>いうたら、かう云ふんでなかにやあ氣に入らんもんと見えるけなう」（現行全集245頁16行目）という、清兵衛に奇抜な形の瓢箪を薦めた人物の発言もみえる。ここでは確かに（こういう瓢箪）は「かう云ふん」と表現されている。

## 結び

「清兵衛と瓢箪」の本文には「尾道」はみえないが、その会話文の修訂の方向をみるとやはりその先にあるのはまぎれもなく「尾道」であるといえるであろう。

また「かふいふがええんぢや」（新仮名遣いでは「こいうがええんじや」）は、現在最新の『志賀直哉全集』（平成十一年）でも岩波文庫や新潮文庫でも「清兵衛と瓢箪」の本文の一部として取り入れられ、広く流通している。当然、「清兵衛と瓢箪」研究においても「かふいふがええんぢや」が引かれ、論じられている。<sup>10</sup>だが、これはやはり大正二年の初出でも

大正六年の作品集初収本文でも存在した「ん」が大正七年の本文作成で脱落して生まれた一文であると考えるべきであろう。

「かふいふがエ、んぢや」が妥当でないことは、尾道市民がよく知っている。

〔尾道大学日本文学論叢〕第3号（平成19年12月）初出、  
原題『清兵衛と瓢箪』の会話文、一部改）

## 注

(1) 「創作餘談」〔改造〕第10巻第7号、昭和3年7月）  
および「暗夜行路草稿4」参照。後者は著者の令孫、  
志賀道哉氏の了解を得て、その画像が初めて「暗夜  
行路草稿4」の影印と翻字」（『尾道文学談話会  
会報』第2号、平成23年12月）に掲載された。

(2) 尾道大学地域総合センター主催の第2回「尾道学  
講座」。平成18年10月19日、しまなみ交流館大会  
議室で開催。拙稿「志賀直哉と尾道」〔尾道の芸  
術文化』、尾道大学地域総合センター叢書1、平  
成19年年10月）参照。

(3) 甲と乙における異同の詳細は末尾の表の通り。当  
初は、初出本文（甲）とその後の単行本所収本文

（乙）という分け方で著者の修訂の様態を見るこ  
とが可能だと考えていた。後述するように、尾道  
市民への質問を通じて、乙として一括した『大津  
順吉』所収本文と『夜の光』所収本文との間の異  
同も看過できないことが判明した。

(4) 拙稿「志賀直哉「清兵衛と瓢箪」考（上）―テク  
ストの変遷とある瓢箪の〈旅〉―」（『尾道大学芸  
術文化学部紀要』第5号、平成18年3月）

(5) 詳しくいえば、志賀直哉が「尾の道」の「停車場」  
に到着したのは、『旅行案内』などから推測すると、  
大正元年十一月十日（日）の午後「十一時十分頃」  
であろう。（2）に示した拙稿「志賀直哉と尾道」  
参照。

(6) 甲と乙の会話文は、アットランダムに上下に置き、  
出席された方に選んでもらった。

(7) (2)と同じ場面での清兵衛の発言に、「屹度誰にも賣  
らんといて、つかわつしえのう」（初出）があり、  
これも(2)と同様に『大津順吉』所収本文で「つか  
あせえのう」と改められている。

(8) (3)の校異表「甲と乙の異同」（★印の項）参照。

(9) (3)の校異表「甲と乙の異同」（1)の項）参照。

(10) 池内輝雄「志賀直哉『清兵衛と瓢箪』論」（『日本

